

自然会話の教材化とディスコース・ポライトネス理論2: 教材としての自然会話の価値

東京外国語大学大学院地域文化研究科
言語教育学講座
宇佐美まゆみ
usamima@tufs.ac.jp

はじめに

本稿は、二部にわたる論考の第二部である。第一部では、自然会話教材開発の理論的背景にもかかわるブラウンとレビンソン (Brown & Levinson, 1987) の「ポライトネス理論」と、宇佐美 (1998, 2001a, 2001b, 2001c, 2002, 2003b, Usami, 2002) の「ディスコース・ポライトネス理論」を紹介し、対人コミュニケーションを円滑に行うための視点を提供することを試みた。ディスコース・ポライトネス理論の観点から考えると、第二言語における円滑なコミュニケーションの方法を身に付けるということは、目標言語における様々な「談話の基本状態」を適切に見積もることができるということであり、また、適切な有標行動が行えるということである。換言すれば、話し手と聞き手の「談話の基本状態」の捉え方がほぼ一致しており、且つ、ある言語行動の「フェイス侵害度の見積もり差 (De 値)」が「0をはさんだ許容されるずれ幅」の範囲内に入ることである。当該言語文化における種々の「談話の基本状態」を的確につかみ、有標行動のポライトネス効果がマイナスにならないようなコミュニケーションの仕方を習得するためには、現実のコミュニケーションを体験する機会を増やすことが必要である。そして、それができるのは、自然会話を素材とする教材のみである。

これまでも、特にコミュニケーション・アプローチのように、コミュニケーションを重視した教授法においては、生教材の活用が指摘されてきた。生教材は、「言語の機能と文脈との関係認識と異文化理解を高める」ために有用であるからである (岡崎他, 1992: 53)。しかし、生教材の中でも、自然会話そのものを用いた日本語教材は未だない。その理由のひとつには、無限にあると言ってもよい「自然会話」の中から、何をどういう基準で選択し、言語教育のための教材として活用すべきかということが、未だ定まっていないからであろう。人間の相互作用において、様々な談話の基本状態や、種々の行為のフェイス侵害度を見積もるために有用な要素は日常のあらゆるところにある。しかし、それらを人為的に再現するのは不可能である。その結果、いかに「自然な会話」をめざそうとしても、創作された会話は、実際の自然会話とはいろんな意味でかなり異なるものになってしまうのである。

本稿では、まず、コミュニケーションのための言語教育において重要な「プロフィシェンシー」という概念を談話研究の視点から論じた後、創作会話と自然会話⁴のやりとりにおける様々な違いを具体例を基に論じる。最後に、自然会話教材『自然会話で学ぶ日本語—An invitation to Authentic Japanese—』の作成方針をまとめ、その試作版を簡単に紹介する。

⁴ 本稿で扱った会話は、収集者が会話場面を設定したという点で、厳密には、準自然会話といえるが、創作会話とは違って、会話を加害の言語行動自体は統制されていない自然なものである。そのため、本稿では、冗長をさけるため、これらも含めて「自然会話」と呼ぶ。

1. 談話研究の視点から捉えたプロフィシェンシー

創作会話と自然会話における相互作用の特徴の違いを論じる前に、ここでは、まず、「談話研究の視点に基づくプロフィシェンシー」の捉え方を提示しておきたい。

談話研究に基づく視点からは、「プロフィシェンシー」とは、言語行動 (活動) を、大きくは、次の3つの観点から総合的に評価して捉えられるものと考えることができる (宇佐美, 2006a)。

1. 伝達意図⁵の達成度: 当該言語において意思疎通ができる能力
2. ポライトネスの適切性: 当該言語における意思疎通や感情のコミュニケーションが、対人関係的観点から円滑に行える能力
3. 言語行動の洗練度: 当該言語・文化において洗練されているとみなされている言語行動ができる能力

つまり、「伝達意図」の達成度として測れる、「どのような言語活動がどれほどできるか」というタスク処理能力を重視した機能的言語能力 (functional language ability) に加えて「対人コミュニケーション能力」としての「ポライトネスの適切性」という観点、及び、言語表現法自体の「洗練度」という概念を新たに加え、「プロフィシェンシー」というものを捉える。

「言語行動の洗練度」は、文レベルの表現の洗練度 (文法、発音、語彙等) と、談話レベルの洗練度 (語用論的能力、社会言語学的能力、流暢さ) から考える。例えば、文脈にもよるが、例えば、「明日は、都合が悪いです。」よりも、「明日は、ちょっと…」のほうが洗練度が高いと判断するようなことを指す。

このプロフィシェンシーを、3つの観点、「伝達意図の達成度」、「ポライトネスの適切性」、「言語行動の洗練度」から高めていくには、第一部でも述べたように、まずは実際の自然会話のやりとりを、様々な観点から分析することが必須である。

以下では、教材のために作られた会話と比較しながら、自然会話を分析し、その特徴と教材としての価値を考える。

2. 自然会話の特徴とプロフィシェンシー

ここでは、創作会話と自然会話の特徴を比較するために、「問い合わせる」という言語行動を取り上げて分析する。

2.1 教材のために創作された会話

以下は、東京外国語大学のTUES会話モジュール⁶における、「時間について尋ねる」というスキットを文字化したものである。

それぞれの発話の右側に、ポイントとして指摘できる点を挙げておく。「質問」は、質問の機能がある発話、「答え」は、答えの機能がある発話である。

<会話1 教材用に創作された会話>

⁵ 宇佐美 (2006a) では、「情報の伝達度」と呼んだものである。

⁶ 東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」では、外国語学習教材として、17言語において、40の機能ごとに40のスキットを収録した会話モジュールをウェブ上で公開している。URLは次のとおりである。http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/

状況：学生の鈴木さんが図書館の利用について尋ねる。

ライン番号	話者	発話内容	ポイント
1	鈴木	すみません。	
2	図書館員	はい。	
3	鈴木	図書館は夏休み中も開いていますか。	質問
4	図書館員	ええ、開いていますよ。	答え
5	鈴木	何時から開いていますか。	質問
6	図書館員	9時からです。	答え
7	鈴木	自習室は何時まで使えますか。	質問
8	図書館員	5時まで使えます。	答え
9	鈴木	土日也使えますか。	質問
10	図書館員	夏休み中は、土日はお休みなんです。	答え
11	鈴木	ありがとうございます。	

この会話の特徴として、以下のことがあげられる。

- 「質問」-「答え」の定型的なやりとりで終わっている。教科書におけるやりとりのように、意図伝達のための必要最低限の発話のみで構成されている。
- 前の発話を受けて次の発話を行うというよりは、聞きたいことをすべて質問している、という感じを受ける。
- 談話の中で、タスクの難易度が変化するようなことはない。例えば質問や答えの内容が談話展開に応じて複雑になるようなことはなく、単文のままである。
- 「伝達意図の達成度」「ボライトネスの適切性」は、最低限を満たしているが、「言語行動の洗練度」が低い。

2.2 自然会話：不動産屋での問い合わせ

先の創作会話（図書館での問い合わせ）と全く同じ場面を自然会話データの中から選び出すことは難しい。ここでは、比較的条件に近い「不動産屋で問い合わせる」という行動が含まれている中級話者と超級話者それぞれのデータ⁹を取り上げ、解説する。

ACTFL Oral Proficiency Guidelines では、話者にとって、常々繰り返されている活動や、身近な場面では、あまり高い遂行・処理能力を必要としないとされているが（録田、2000: 18）、不動産屋で部屋を探すという活動は日常的に繰り返されるものではないため、高い「機能／タスク遂行能力」や「場面／内容処理能力」が求められる場面であると言える。

⁹本稿では、宇佐美（2003a, 2006）の「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）」を簡略化して示す。

⁸ここで紹介する会話は、2005年度に東京外国語大学大学院で行われた夏期集中講義（接触場面の教材化：録田）の採録として学生が録画した会話である。

話者：日本語学習者（中級話者、ベトナム人）と不動産店員

日本語学習者（超級話者、韓国人）と不動産店員

場所：東京外国語大学周辺の不動産屋

内容：部屋を探す

<会話2 日本語中級話者>

状況：ベトナム人男性グエンさん（仮名）が、引越しの相談のために不動産屋を訪れる。はじめにアンケートに記入し、希望する地域を伝えた後のやりとりである。

以下の表の中の「ポイント」「スピーチレベル」の欄に記載してあることは、以下の内容である。

ポイント：それぞれの発話において、機能や特徴として指摘できる点を挙げている。例えば、創作会話との比較のため、質問の発話の部分には「質問」と記した。また、「意味交渉のプロセス」は意味交渉が行われている箇所を示す。

スピーチレベル：「ボライトネスの適切性」「言語行動の洗練度」という観点から、文末に「です」が必要かどうかを示した⁹。「...」は、いい込みがあったほうが自然であることを示す。

ライン番号	話者	発話内容	ポイント	スピーチレベル
67	グエン	/少し間/あと、あー、ん、この、駅の近くに、		
68	店員	はい。		
69	グエン	スーパーマーケットがありますか？	質問	
70	店員	はい、ここ、『丸正』っていうところと、(あー)ここ、『サクラコマース』。		
71	グエン	『サクラコマース...』。		
72	グエン	あの、何の店ですか？	質問	
73	店員	これスーパー<マーケット>ですね<？>。		
74	グエン	<スーパーマーケット><？>、あ、そう。		←ですか要
75	店員	あと郵便局とか、色んなものここにね(おお)、大きな車返団地'くるまがえしだんち'っていうのがあるので、ここ大きなスーパーマーケットが、ね、団地のためにあるような感じです。		
76	グエン	でも、値段はどう？	質問	←ですか要

⁹2人の評定者間信頼性係数を算出している。会話2はk=0.79、会話3はk=0.85であった。kが0.7未満であれば、コーディングの定義、分類方法等々に問題があると思われるほうがよいとされている(Bakeman & Gottman, 1986)。また、0.75以上は、大変信頼性が高いと見なしてよいとされている。

77	店員	値段は比較的、中央線に比べれば全然安いと思いますよ><。		
78	グエン	<あー>>。		
79	店員	<はい><。		←ですか 要
80	グエン	<いくら>><。	質問	←ですか? 要
81	グエン	えっと、1ヶ月(んー)いくら?。		
82	店員	いくらぐらいをご希望ですか?。		
83	店員	一番出せる金額はいくらですか?。	不自然な表現:フォリナートークと考えられる	
84	グエン	ん、なんですか?。		
85	店員	ん、家賃。		
86	グエン	あ、い、意味、家賃は?。[]	意味交渉のプロセス	←ですか? 不要
87	店員	家賃の、一番お金を出せる金額は、いくらまでですか?。		
88	グエン	あのえ、4せ、4万。		←「...」
89	店員	4万円ぐらいですね。		
90	グエン	4万円ぐらい。	コミュニケーションの成功	←ですか? 不要(復唱)
91	店員	/沈黙2秒/はい、4万円ぐらいで、じゃあ3万円台で探すということですよ。		
92	グエン	でも、このー(うん)、このー、お金ぐらいい(ん)、えっとー、キッチンやシャワーはどう?。	質問	←ですか?要
93	グエン	キッチン、そのー...。	意味交渉のプロセス	
94	店員	キッチン??、えー、光熱費かな??。	コミュニケーションの失敗	
95	店員	あのガスとか、電気<とか><。		
96	グエン	<うん>>、うん。		
97	店員	うん、そういうお金をまた別に支払わなくてはいけません。		

98	グエン	あー、(うん)別。		←ですか 不要
99	店員	別です。		
100	グエン	えーと、あー、自分の部屋は<ない><。	助詞の使い方	←ですか? 不要
101	店員	<そうで>>すね。	意味交渉のプロセス	
102	店員	え?、別の(ん)、あー、(あ)うん、例えば、んー、ちょっと待ってね。[店員が資料を取りに席を立つ]		
103	店員	/沈黙5秒/こちらの今ちょっと多磨駅の近くの(はい)物件なんです、ちゃんとどのお部屋にもこういう風にお部屋に(んー)、キッチンがあって、(はい)おトイレとお風呂がある感じですね。		
104	グエン	あー、じゃ、全部4万。	助詞の使い方	←「...」
105	グエン	1ヶ月4万?。		
106	店員	ん、これはちょっと違いますけれども(んー)、1ヶ月4万円のところを、探す、という形になります。	コミュニケーションの成功	

この会話の特徴として、以下のことがあげられる。

- 「質問」ー「答え」という形ばかりではなく、「答え」から発展したやりとりもみられる。
- 相手からの質問に対して、なかなか答えられない。「機能/タスク遂行能力」があまり高くないため、予期しない活動にうまく対応できない。
- 意味交渉のねじれがおき、機能/タスクの遂行が難しくなる時がある。
- 「伝達意図の達成度」「ポライトネスの適切性」は、対人関係に支障が出るほどではないが、時々、問題が生じている。また、必要なところで「ですか」や言い淀み「...」を使わない等、「言語行動の洗練度」は低い。

<会話3 日本語超級話者>

状況：韓国人男性金さん(仮名)が、引越しの相談のために不動産屋を訪れる。アンケートに記入した後のやりとり。

以下の表の中の「ポイント」「スピーチレベル」の欄に記載してあることは、以下の内容である。

ポイント：それぞれの発話において、機能や特徴として指摘できる点を挙げている。例えば、「『が』の終助詞的用法」。また、「日本のお風呂のシステムについて」のように、話題内容を示している場合もある。「助詞の使い方」は助詞の使い方の適否が微妙だった箇所である。

スピーチレベル：文末に「です」が現れていない場合、「ポライトネスの適切性」「言語行動の洗練度」という観点から、それが「省略可能」かどうかを示した。

ライン番号	話者	発話内容	ポイント	スピーチレベル
36	店員	はい、今回お引越しということで、お部屋探しです<よね>{<}。		
37	金	<あ>{>}、はい。		
38	店員	ご自身、お1人様だけですか？		
39	金	あ、そうです。		
40	店員	はい。		
41	店員	じゃあ1部屋あればいいですね。		
42	金	そうで<すね>{<}。		
43	店員	<駐車>{>}場は必要ですか？		
44	金	えー、今の時点で要らない<です>{<}。	助詞の使い方	
45	店員	<要ら>{>}ないですねー。		
46	金	はい。		
47	店員	大体、場所はどのへんをご希望されて<いますか>{<}。		
48	金	<えと>{>}、学校から、		
49	店員	はい。		
50	金	自転車<で>10分ぐらいの。		省略可能
51	店員	学校から(はい)10分ぐらいのところ(はい)ですね。		
52	店員	自転車。		
53	店員	[NNSが軽くなずく]はい。		
54	店員	と、お部屋なんです、(はい)間取りは、和室と洋間があるんですけど。		
55	金	えーと、洋間で。		省略可能
56	店員	洋間で。		
57	金	はい。		
58	店員	はい。		
59	店員	和室は嫌いですか？		
60	金	え、別に嫌い<や>でもない、(笑)<い>い、嫌い<や>ではないんですけど、あの、できれば<って>いうことで<{<}。	条件付きの希望の述べ方	省略可能
61	店員	<できれば>{>}洋間のほうがいいですか？		
62	金	はい。		
63	店員	広さはどのぐらいあればいいですかー？		
64	金	えーと、部屋の広さだけで6畳ぐらいあればいいと思うんですが。		「が」の終助詞的用法
65	店員	6畳ですね。		

66	金	=はい。		
67	店員	はい。		
68	店員	お風呂トイレは？		
69	金	えっとー【【。		
70	店員	】】列々のと、3点ユニットといって一緒のタイプのものであり<ますが>{<}。	日本のお風呂のシステムについて	
71	金	<えっと>{>}、ユニットバスでもかまわない、です。		
72	店員	=ユニットバスでも大丈夫<です>か{>}{<}。		
73	金	<はい>{>}。		
74	店員	はい。		
75	店員	家賃によっては、って感じ<です>ねー{<}。		
76	金	<あ>{>}、はい。		
77	店員	はい。		
78	店員	お部屋のある階数、1階とか2階にはこだわりあります<か>{>}{<}。		
79	金	<えーと>{>}、階、その...、ん、できれば2階のほうで、	日本の部屋のシステムについて	
80	店員	2階のほうがいいですね。		
81	金	で、あの、部屋と部屋の、その間があって、角、のほうがいいんですけども。		「けれど」の終助詞的用法
82	店員	角部屋<です>ねー{<}。		
83	金	<はい>{>}。		
84	店員	/少し間/はい。		
85	店員	オートロックは要らない<です>ね？、<特に>{<}。		
86	金	<や、別に>{>}、<そっちは>{<}。		省略可能
87	店員	<はい>{>}。		
88	金	はい。		
89	店員	あと、お日様の関係の、向きなんです<けれども>{>}、【【。		
90	金	<えっと>{>}、南。		省略可能
91	店員	南とか。		
92	金	はい。		
93	店員	あと東でも大丈夫<です>か？。		
94	金	ん、大丈夫<だ>と思います。		
95	店員	できれば南<って>感じ<で>{<}。		
96	金	<はい>{>}。		
97	店員	はい。		

この会話の特徴として、以下のことがあげられる。

- 「答え」から発展したやりとりがスムーズに行われている。
- 「伝達意図の達成度」、「ボライトネスの適切性」、「言語行動の洗練度」のいずれも高い。

中級話者と超級話者、それぞれの会話におけるやりとりを比較すると、以下のようことが言えるだろう。

- どちらの学習者も、同じように不動産情報を得ている。つまり、意思疎通はできており、「伝達意図の達成度」には、大きな問題はない。
- しかし、以下の点で、中級話者と超級話者のやりとりやプロフィシェンシーが異なる。
 - 中級話者：中途終了型発話やスピーチレベルシフト（です・ますの使用／不使用の切り替え）を使っているが、適切ではないところが目立つ。
 - 超級話者：中途終了型発話やスピーチレベルシフトを適切に使用している。

これらの言語ストラテジーは、「ボライトネスの適切性」、「言語行動の洗練度」の両方にかかわってくる。

このような現象は、自然会話を分析してはじめて明らかになるものである。自然会話分析研究により、単に「ある言語行動ができるかどうか」ではなく、「ある言語行動を、どこで、どのように適切に行うことができるか」、すなわち、「ボライトネスの適切性」や「言語行動の洗練度」にかかわる要因を明らかにしていくことができる。そこから得られた知見を、自然会話の教材化に生かすとともに、また、自然会話教材を活用する際の指導項目の選定や、指導方法の工夫につなげていく必要がある。

3. 自然会話を素材とする教材の制作方針

あいづち、中途終了型発話、言いよどみ、笑いといった自然会話に特徴的な言語行動は、自然会話を活用した会話教材の中で、扱っていく必要がある。ここでは、現在開発中の自然会話教材『自然会話で学ぶ日本語—An Invitation to Authentic Japanese—』の制作方針を簡単にまとめる。

この教材の制作の方針は、以下の5つである。

1. 母語場面と接触場面の両方の会話を素材とする。
2. どのレベル（初級・中級・上級・超級）の学習者にも使える教材とする。
3. 文型を文脈化するのではなく、文脈を文型化する（録田 2002）。
4. 自然会話の「文字化資料」を活用する。
5. 自然会話に特徴的な会話のストラテジーを重視する。

自然会話が本教材の素材であるから、焦点の当て方によって、どのレベルの学習者にも使えるものとなりうる。また、従来の文型・機能を出発点とした教材のように、あらかじめ提示すべき学習項目に基づいて「会話場面」を作るのではなく、実際の会話の中からその場面で必要な学習項目を抽出していく。これによって、従来の会話教育では積極的に提示されてこなかった中途終了型発話や、2人以上の話者が一つの文を作る共同発話文等といった、自然会話に特徴的な現象を、まずは学習

者に気づかせることができる。また、母語話者と非母語話者の会話からは、同じ「日本語学習者」である人物の言語行動を見ることによって、学習者が自らの言語行動を可視化し、振り返ることができるようになる。

もう一つの大きな特徴として、人間の相互作用の分析に適用することを目的として開発された文字化資料（BTSJ）（宇佐美、2003a、2006a）を活用することがあげられる。会話の全体像をつかんだ上で、個々の場面に区切り、その文字化資料を参照しながら、自然会話に特徴的な項目に注目し、そこで行われているやりとりを理解させるようにする。

現段階では、各シーンごとにいくつかの学習項目を分類し、あいづち、笑い、言いよどみ、中途終了型発話といった自然会話に特徴的な現象について解説する箇所を設けている。

教材の形態は、ハイパーリンクが活用できるように、HTML形式をとっている。この形式により、文字化資料を見たり会話の映像を見たりと、必要に応じて画面の行き来をすることが容易となる。将来的には、インターネット上にアップし、世界中どこからでも教材にアクセスできるようにすることを目指している。

4. 自然会話を言語教育の教材として活用する意義

初めに述べたように、当該言語文化における種々の「談話の基本状態」を的確につかみ、有標行動のボライトネス効果がマイナスにならないようなコミュニケーションの仕方を習得するためには、現実のコミュニケーションを追体験する機会を増やすことが必要である。自然会話を素材とする教材は、そのような機会を提供する唯一の教材であると言える。そして、それが、自然会話を教材として活用することの最も大きな意義である。自然会話を素材とすることの利点には、この他にも、以下のような点があげられるだろう。

- ① 日本への興味を喚起、日本語学習への動機付けになる。
- ② 学習者として、実際のコミュニケーションの疑似体験ができる。
母語話者だけでなく、非母語話者の会話を見ることにより、学習者自身の言語行動を振り返ることができる。
- ③ 言語使用を非言語行動とともに理解できる。
- ④ 教科書の日本語と、自然な日本語の違いを意識化できる。
- ⑤ 学習者自身が、学びたいことを見つけることができる。
- ⑥ 自然会話における重要なポイントを効率的に提示できる。

また、この教材は、ウェブを利用して、誰もがアクセスできるような設計を目指している。将来的には、リソースバンクのようなものを設定し、個人々が撮影した自然会話場面を、一定の規則に基づいて蓄積し、共有していくことも構想している。このような学びのネットワークに広がりを持たせることを可能にすることを考えても、自然会話を教材化していくことの意義は大きいと言えるだろう。

おわりに

二部にわたる本論文では、第一部で対人コミュニケーションを円滑に行うための視点を提供する「ディスコース・ボライトネス理論」を紹介し、第二部で創作会話

と自然会話における相互作用の特徴を比較分析することによって、言語教育の教材として自然会話を活用する意義を論じた。最後に、自然会話を素材とする教材の枠組みとそれに基づく試作版の制作方針を紹介した。

第一部でも述べたように、ディスコース・ポライトネス理論の観点から見ると、第二言語における円滑なコミュニケーションの方法を身に付けるということは、目標言語における様々な「談話の基本状態」を適切に見積もることができるということであり、また、適切な有標行動が行えるようになるということである。そのためには、現実のコミュニケーションだけでは効率的に体験できないやりとりも含めた種々の場面ややりとりを、自然会話教材を活用することによって、追体験することが必要である。というのは、本稿で見てきたように、自然な会話におけるやりとりの特徴を創作会話に忠実に反映させるといことはほとんど不可能であり、自然なコミュニケーション方法を修得するためには、自然会話そのものを教材に活用するはかないからである。

初めに述べたように、人間の相互作用において、様々な談話の基本状態や、種々の行為のフェイス侵害度を見積もるために有用な要素は日常のあらゆるところにある。無限にあると言ってもよい「自然会話」の中から、何をどういう基準で選択し、言語教育のための教材として活用すべきかということは、未だ定まっていない。しかし、自然会話教材を提示することによって、教師側が気づかないが、学習者が必要としている要素に、学習者自身が気づく可能性がある。つまり、学習者自身が自分の学びたい項目を見つけ出すのである。自然会話を素材とする教材の開発においては、学習者の視点を「取り入れる」のではなく、学習者自身が見つけ出した視点を学習項目に「反映する」ことが可能になる。このように、学習項目の決定を自分自身で行うことにより、学習者は、主体性を持って言語学習に取り組むことができる。そして、教師は、学習者と共に学習項目を見つけ出すことによって、学習者が何を必要としているかを知り、言語教育において求められているものを認識するきっかけにできる。自然会話を教材として活用することによって、真に双方向的な教材を共同で作上げていくことができるのである。

これからの課題は、マルチメディアによる学習環境の充実である。WWWを通して教材を発信する場合は、ある程度の動画を支障なく再現できるようなマルチメディア環境が必須であるからである。この教材が体系化されて充実する頃には、ルーマニアも含めた世界のマルチメディア環境が、さらに充実してきていることを願っている。

引用文献

- Brown, P. & Levinson, S. C. 1987 *Politeness: Some Universals in Language Usage*. New York: Cambridge University Press.
- 鎌田修 2000 「日本語の会話能力とは何か—プロフィシェンシーの観点から—」シンポジウム「会話能力とは何か：その習得と教育」『2000年度日本語教育学会春季大会予稿集』、日本語教育学会、17-22.
- 2002 「接触場面の教材化—ヨーロッパと日本を舞台に—」『ヨーロッパの日本語教育』2002年日本語教育シンポジウム・第7回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集、ヨーロッパ日本語教師会・ハンガリー日本語教師会、32-43.

岡崎敏雄・川口義一・オ田いずみ・畠弘巳 1992 「コミュニケーション・アプローチ」『ケーススタディ日本語教育』桜楓社

宇佐美まゆみ 1998 「ポライトネス理論の展開：ディスコース・ポライトネスという捉え方」東京外国語大学日本課程・留学生課（共編）『日本研究・教育年報1997年度版』、147-161. 東京外国語大学

——— 2001a 「ポライトネスの談話理論構想」国立国語研究所（編）『談話のポライトネス』凡人社 pp9-58.

——— 2001b 「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能—敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること—『語学研究所論集』6、1-29 東京外国語大学語学研究所

——— 2001c 「二一世紀の社会と日本語」『月刊言語』第30巻第1号、20-28. 大修館書店

——— 2002 連載「ポライトネス理論の展開 I-12」『月刊言語』31 (1-13). 大修館書店

——— 2003a 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』、平成13-14年度 科学研究費補助金 基盤研究C (2) 『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』(課題番号: 13680351) (研究代表者: 宇佐美まゆみ)、研究成果報告書、4-21.

——— 2003b 「異文化接触とポライトネス—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—」『国語学』54 (3)、117-132. 国語学会

——— 2006a 「談話研究からの視点」『南山日本語教育シンポジウム プロフィシェンシーと日本語教育 日本語の総合的能力の研究と開発を目指して』、関西 OPI 研究会、19-31.

——— 2006b 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2005年2月25日版」『自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』、東京外国語大学大学院地域文化研究科 21世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」、21-46.

Usami, M. 2002 *Discourse Politeness in Japanese Conversation: Some Implications for a Universal Theory of Politeness*. Hituzi Syobo.

【参考サイト】

- 東京外国語大学大学院 21世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」Tufs 会話モジュール
<http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/index.html>
- 平成17~18年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ「多言語社会に貢献する言語教育研究者養成」プログラム
http://www.tufs.ac.jp/common/pg/gengo_yousei/index.html
- 宇佐美まゆみ (2003-2006 予定) 『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度科学研究費補助金基盤研究B (2)、研究代表者宇佐美まゆみ (課題番号 1532064)
<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/kenkyukatudo.htm>

文字化資料で用いられている記号凡例 宇佐美 2006b より抜粋

- 。 [全角] 1発話文の終わりにつける。
- ” 発話文の途中に相手の発話が入った場合、前の発話文が終わっていないことをマークするためにつけ、改行して相手の発話を入力する。
- 、 [全角] 1発話文および1ライン中で、日本語表記の慣例の通りに読点をつける。
- ‘ ’ 発話と発話のあいだに短い間がある場合につける。
複数読み方があるものを漢字で表す場合、最も一般的な読み方ではなく、特別な読み方で発せられたことを示すために、その読み方を平仮名で‘ ’に入れて示す。
通常とは異なる発音がなされた場合など、音の表記だけでは意味が分かりにくい発話は、‘ ’の中に正式な表記をする。
- 『 』 視覚上、区別した方が分かりやすいと思われるもの、例えば、本や映画の題名のような固有名詞や、発話者がその発話の中で漢字の読み方を説明したような部分等は、『 』でくくる。
- ? 疑問文につける。
- ?? 確認などのために語尾を上げる、いわゆる「半疑問文」につける。
- [][][] イントネーションは、特記する必要があるものを、上昇、平板、下降の略号として、[][][]を用いる。
- /少し間/ 話のテンポの流れの中で、少し「間」が感じられた際につける。
- /沈黙 秒数/ 1秒以上の「間」は、沈黙として、その秒数を左記のように記す。
- = = 改行される発話と発話の間（ま）が、当該の会話の平均的な間（ま）の長さより相対的に短いか、まったくないことを示すためにつける。これは、2つの発話（文）について、改行していても音声的につながっていることを示すためである。
- … 文中、文末に関係なく、音声的に言いよんどんだように聞こえるものにつける。
- < >{<} 同時発話されたものは、重なった部分双方を< >でくくり、重ねられた発話には、< >の後に、{<}をつけ、そのラインの最後に句点「。」または英語式コンマ2つ「,,」をつける。また重ねた方の発話には、< >の後に、{>}をつける。
- [[]] [全角] 第1話者の発話文が完結する前に、途中に挿入される形で、第2話者の発話が始まり、結果的に第1話者の発話が終了した場合は、「[[]]」をつける。
- [] 文脈的情報。その発話がなされた状況ができるだけわかりやすくなるように、音声上の特徴（アクセント、声の高さ、大小、速さ等）のうち、特記の必要があるものなどをそのラインの最後に記しておく。
- () 短く、特別な意味を持たない「あいづち」は、相手の発話中の最も近い部分に、()にくくって入れる。
- < > 笑いながら発話したものや笑い等は、< >の中に、<笑いながら>、<2人で笑い>などのように説明を記す。
- (< >) 相手の発話の途中に、相手の発話と重なって笑いが入っている場合は、短いあいづちと同様に扱って、(<笑い>)とする。